

(対象事業：地域連携強化事業・地域文化資源整備活用事業・ミュージアム支援地域人材育成事業
・国際交流拠点形成事業)

事業名： 地域の人々と知る、古代の木造建造物保存のための
瓦の役割

事業者名： 帝塚山大学附属博物館

住所： 〒631-8501 奈良県奈良市帝塚山7丁目1-1

TEL：0742-48-9700

FAX：0742-48-8783

HPアドレス：<http://museum.tezukayama-u.ac.jp/>



帝塚山大学附属博物館

連携事業者名： 帝塚山歴史文化教室

会場： 帝塚山大学附属博物館

事業期間： 平成21年10月19日 ～ 平成22年2月20日

1. 館の使命と本事業の関係

帝塚山大学は「開かれた大学としての地域貢献」を常に視野においており、当附属博物館もそれに即した活動を展開するように努めている。当館所蔵の考古資料の9割以上が古代の瓦罎類であり、瓦というものが建物を保護する機能を持っていることを主眼として展示を行っている。今回の支援事業では、奈良に立地する大学附属博物館として、木造建造物の保護・保存に特に瓦が果たしている効用を地域の人々に知ってもらうことで文化財保護精神の向上に寄与するものと考えている。

2. 企画内容

①事業目的

現在、わが国には奈良時代以前に建てられた木造建造物が約30棟存在し、そのほとんどが奈良県内にある。それらは数十年ごとに解体修理が行われて現在にまで伝えられてきた。その工事の際、再使用不能の瓦は新しい瓦と取り替えられ、その効用によって建物が保存されてきた。本学では、附属博物館所蔵の日韓古代瓦を中心として、瓦の研究を進めてきた。その成果を踏まえ、地域の人々と共に瓦を観察しながら、瓦の効用を本学学生、地域の人々、とくに子供たちに知ってもらい、文化財保護精神の育成に寄与したい。

②事業概要

古代瓦の観察、写生、拓本採取などを帝塚山大学附属博物館で行い、実際に瓦を手に取りその重量や強度を知ることで瓦に親しみを感ぜてもらおう。

また、瓦そのものの観察を行い、その特徴をとらえるために写生・拓本採取を行う。数千年、あるいは数百年建物を護ることのできる瓦作りに実際に挑戦する。その一方で、数百年、千数百年木造建造物を護ってきた瓦の観察を興福寺や東大寺で観察する。このことによって、重要文化財や国宝に指定されている木造建造物に対する見方に、新たな要素が加わり、文化財保護の意識がより高まることが期待される。

3. 事業実績

(1) 事業の主な内容及び日程

本事業は、通常重視されていないように思われる、瓦類が木造建造物の保護・保存にいかに関与しているかということを中心としたものであり、実際に古代の瓦を手にとったり、拓本採取を行ったり、あるいは伝統的な瓦の生産を行なっている工場で瓦作りを体験するというものである。また、実際に中世や古代の木造建造物を見学し、瓦の効用を実感するものである。事業は、おおむね以下の日程によって行なった。

平成 21 年

- | | |
|-----------|---|
| 10 月 19 日 | 主要メンバーとの打ち合わせ
事業の目的とその概要を説明した。 |
| 10 月 25 日 | 事業参加者への説明
事業参加者に目的と概要を説明し、帝塚山大学附属博物館展示室で展示解説を行なった。 |
| 11 月 8 日 | 瓦類の観察・写生・拓本採取
瓦類の目視による観察の後、写生を行なった。忠実に写生することによって、瓦の特徴を捉えることができるからであり、それによって、その後に行う拓本採取に有効である。 |
| 11 月 15 日 | 興福寺における中世建築の見学
興福寺は度重なる火災のため、古代の建物は残っていないが、北円堂や五重塔など鎌倉・室町時代に再建された堂塔を数棟見ることが出来る。それらの建物には再建当時の瓦がかなり葺かれており、色の違いによってそのことが判断できる。 |
| 11 月 22 日 | 古代瓦の製作体験
瓦作りの体験は、文化財選定技術保存団体である「日本伝統瓦技術保存会」の事務局がおかれている山本瓦工業平群工場で瓦作りに挑戦した。指導者はこの会の会長であり、認定保存技術保持者、そして黄綬褒章受賞者である山本清一氏と同じく保存会講師であり黄綬褒章を受章しておられる鈴木啓之氏である。 |
| 12 月 13 日 | 東大寺における古代建築の見学
平重衡による治承 4 年（1180）の兵火や、松永久秀による永禄 10 年（1567）の兵火で大きな痛手を被った東大寺ではあるが、幸いなことに奈良時代の建物がいくつか残っている。それらのうち法華堂（三月堂）は、昭和 46 年に行われた解体修理工事によって、奈良時代の瓦が大量に葺かれていたことが明らかになり、それらの瓦のうちかなりの数が再び屋根に載せられた。奈良時代に、いかに丁寧に作られたかがわかる。 |

平成 22 年

- | | |
|---------|--|
| 1 月 9 日 | 討論会
討論会は、帝塚山大学附属博物館の講座室で開催した。5 回にわたる行事を経て、それぞれの参加者がどのような感想を抱いたのか、とり |
|---------|--|

わけ今回の主体が「瓦」であることから、どのように感じたのか興味あるところであった。なお、討論会の際に報告書の作成方針を明らかにした。



東大寺の屋根見学



古代の瓦作りに挑戦

(2) 参加者の数

参加者数	延べ	<u>202 人</u>
内 訳 :	大学生	48 人
	小学生	25 人
	大 人	129 人

(3) 事業により作成した印刷物等

チラシ

ポスター

報告書（地域の人々と知る、古代の木造建造物保存のための瓦の役割）

(4) 実施事業に関する新聞記事等

○新聞記事

なし

○テレビ関連・誌等

なし

4. 事業の成果及び今後の課題（参加者の意見を含む。）

奈良の地に 1200 年以上前に建立された木造建造物が、数多く残っていることを知っている人も、30 棟以上残っていることを知っている人も少ない。それらの木造建造物は、幾度もの解体修理工事を経て保存されてきたが、建物を覆っている屋根瓦の効用については見過ごされてきた感がある。

今回の支援事業では、興福寺や東大寺といった建物を観察することによって、その瓦類の果たしてきた役割を多くの人々、特に地域の人々や子供達に知ってもらうことができた。

その役割を理解するために、まず古代瓦を実際に手に取ることからはじめ、自分の目で観察し、写生し、拓本を取ることによって瓦の特徴をつかみ、さらに瓦作りに挑戦した。学生を除いた参加者の全てが初体験であり、何となく参加した人も次第に興味がわき、外出の際にはつい屋根に目が行くという感想をもらしていた。また、瓦がこんなに面白いものとは知らなかった。この事業が終わるのが惜しいとの声もあった。瓦作りに関しては、一流の技術者に指導を受けられたことに感激していた。

主催者としても、最後まで真剣に取り組む人たちが集まったことに感謝している。確実に、文化財保護精神の向上に役立ったと自負している。

今後は、博物館の展示を通して、木造建造物保存に瓦が役に立っていることを、さらに強調する必要があることを痛切に感じた。